

森は海の恋人（3） 森里海連環学

「森は海の恋人」活動に興味を抱いた京都大学農学部水産学科の教授であった田中克先生はやがて「森里海連環学」という新しい学問分野を創り、海洋学や水産学・農学・海洋生物学・環境学・生態学など様々な専門家を集めて「京大フィールド科学教育研究センター」という研究機関を立ち上げました。大学にはこれまで水産・海洋・森林・農・生物などのそれぞれの専門家は居たけれども相互間のつながりがなく縦割りで全く総合的ではなかったそうです。

水産学の先生が山や森・川に興味を示すことはなかったということです。ところがカキの養殖漁師が上流の森に入って広葉樹の植樹をしていると知って興味を抱き、とうとう畠山重篤さんをその「京大フィールド科学教育研究センター」の教授として迎え入れることになったのです。

「魚付林」という言葉は昔からあります。江戸時代の文献にも出て来るそうです。「木一本首ひとつ」とまで言われ、魚付林の木を切れば厳しく処罰される藩もあったようです。つまり少なくとも江戸時代の人には「森は海の恋人」であることを知っていたのです。ところが現代人は京大の先生たちですら知らなかった。漁師に教えられてはじめて気が付いたのです。これには驚きます。僕はおそらく現代人は古代の人たちに比べて相当知識が減り、知恵が乏しくなり、感覚が鈍感になっているのだらうと思っています。このことについてはこの連載エッセイの主たるテーマとしていずれじっくり書きたいと思います。

僕は低山のバリエーションルートとして芦生付近を歩くことが好きですが、その芦生研究林の事務所に「京大フィールド科学教育研究センター」があります。由良川の源流である芦生の上谷から由良川を下って舞鶴湾までを一つの研究フィールドとしているようです。舞鶴には京大農学部の水産学科があります。毎年秋に一般公開講座が芦生の研究棟で行われていてフィールド研の先生たちが簡単な講義をしているので興味の向く方は是非一度受講してみてください。

次回はフィールド研の公開講座で教わった「炭素循環」など循環について書きます。

推薦図書：森里海連環学への道 田中克著 旬報社

TENSION 井上好司